彙　報

サンクト・ペテルブルグ東洋学研究所所蔵内陸アジア出土文書のマイクロフィルム化とその整理について（続報）

『東洋学報』第79巻第4号（1998年3月）でお知らせしたように、東洋文庫は1995年度から、ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクト・ペテルブルグ支部と共同して、同支部所蔵の内陸アジア出土文書のマイクロフィルム化事業を進めてきた。東洋文庫は、すでに大英図書館、フランス国立図書館、北京図書館所蔵の敦煌文書をマイクロフィルムの形で将来していたから、今回いわば最後の重要コレクションであるペテルブルグ文書を収集できれば、世界で最も充実した内陸アジア関係史料のセンターとなることは間違いない。

東洋文庫はサンクト・ペテルブルグ支部所蔵内陸アジア出土文書保存支援委員会（委員長：北村　甫）を編成して、各種言語文献のマイクロフィルム化事業を進めてきた。幸いなことに、財団法人三菱財団および国際交流基金アジアセンターからの積極的な財政支援と、東洋学研究所の誠意ある的確な対応とによって、本事業を所期の計画通り推進することができた。

2001年4月までに将来したマイクロフィルムは約21万8000コマ、その内訳は西夏語7万コマ、ウイグル語・コータン語・ソグド語1万4000コマ、サンスクリット語・チベット語1万8000コマ、モンゴル語1万2000コマ、満洲語3万コマ、漢文文書1万5000コマ、アラビア語1万5000コマ、ペルシア語1万8000コマ、チャガタイトルコ語1万6000コマ、その他約1万コマである。

東洋文庫では、早期の文書公開をめざして、早くから仮目録の作成に着手し、チベット語、コータン語、サンスクリット語文書については、すでに仮目録の作成を完了した。西夏語、ウイグル語、漢文文書についても、近い将来に作成を終了する予定である。これから利用規則の検討を行い、上記文書については、2002年4月から公開に踏み切りたいと考えている。他の文書についても、仮目録の作成を待って順次公開していく予定であるが、これまで未公開であった貴重文書の利用によって、内陸アジア研究に新しい1頁が開かれることを期待したい。

（財団法人東洋文庫　研究部長　佐藤次高）